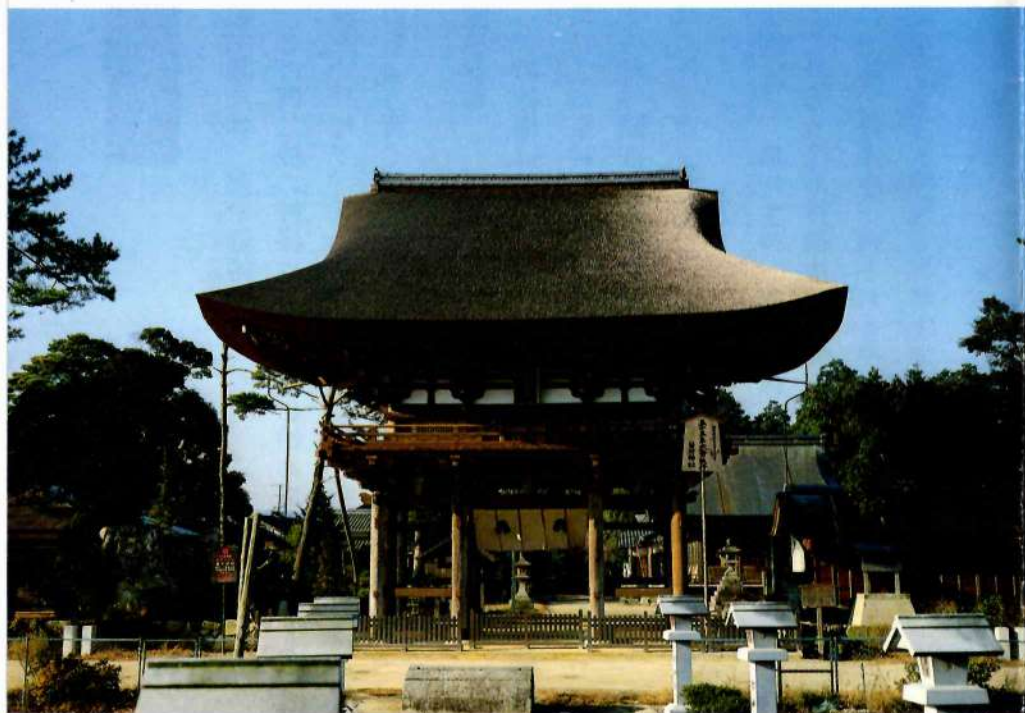




式内 苗村神社由緒略記

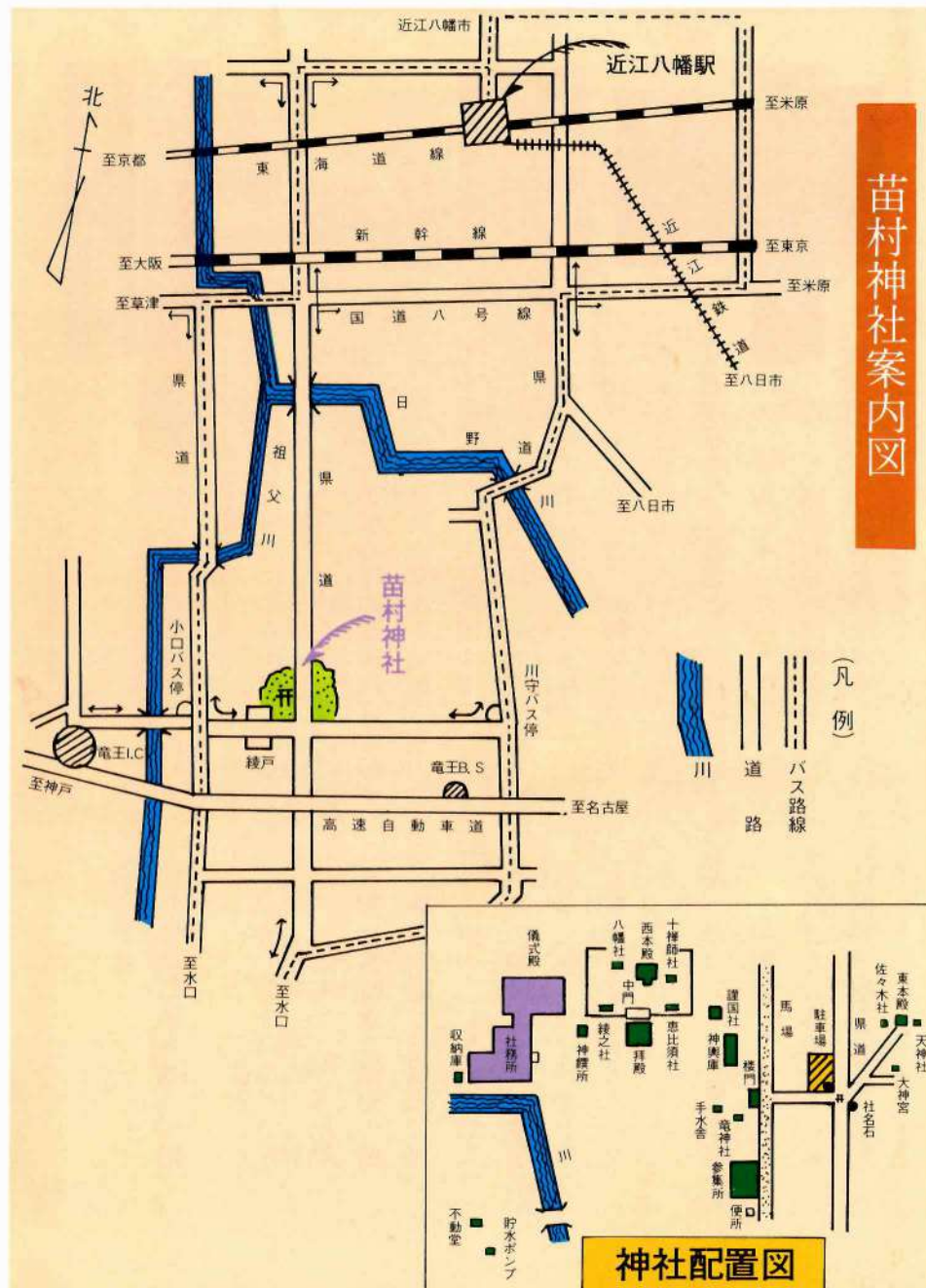


重文、楼門(室町時代)

滋賀県蒲生郡竜王町綾戸鎮座

苗村神社社務所

電話 (07485) 7-0160



御祭神と御神徳

主神

那牟羅彦神、那牟羅姫神
なむらひのひのかみ なむらひめのかみ

この御二柱の神様は、当地方に始めて工芸技術を伝え広められた産土の神様で、その御神徳は誠に広大で、諸願成就の神様として、古来より篤く尊崇申し上げる祖神であります。

國狭槌尊
くにのきつねのみこと

この神様は、国土を開発し、五穀の豊饒と財宝の恵みを垂れ賜い、更にこの祭神を子守大明神と申し上げ、幼児を守護り下さる神様で、その御神徳は是亦広大無辺、誠に格式高き神様として、当地方三十余郷の氏人達がひとしく崇敬申し上げる御祭神であります。

相殿神

大國主神、事代主神、素盞鳴尊
おおくにぬしのかみことしろぬしのかみ すさのをのりみこと

この御三柱の神様は、福徳を授け、良縁を結び、悪疫を滅し、更に五穀の豊饒を守護される神様方で、御神徳高く、古来より篤く崇敬申し上げる神様であります。

御由緒



重文、東本殿(室町時代)



社名石(長寸神社)



出土品・須恵器(古墳時代)

この御社は、延喜の御代長寸神社として神名帳に列座された、格式の高き式内社であります。

その創祀の年代は詳らかではありませんが、遠く上古のことです。即ち当社域内に現存する古墳或は域内外より出土する陶物は、何れも古墳時代の遺跡或は遺品で、これ等は当時既に祖先の遺業に励んだ部民の聚住を物語るもので、これ等の人達は、祖先に対する報恩の念により祖霊を神として、当神域の東の方にお祀りしたのに創ると推定され、その祭神こそ当地方最高の祖神と心得、地名である那牟羅と同音になる長寸(長は最高位の字)の字に替え長寸神社と申し上げました。尚この御社を後の世になつて東本殿と申すようになりました。

その後時代の経過と共に稲作農耕が愈盛んとなつて来ました平安時代の、安和二年(九六九)三月二十八日、大和國芳野金峯山に鎮まり給うた國狭槌尊の御神霊が、この神域の西の方に御遷座されるようになり、社殿を御造営申し上げ、此処に御鎮座の次第となりま



法楽の和歌(一部)



勅額



位記



指定書



国宝、棟札(鎌倉時代)



国宝、西本殿(鎌倉時代)

した。この御社を前述の東本殿に対して西本殿と御呼びびします。

現在の西本殿は、社蔵されている当郡内最古と言われる徳治三年(一三〇八)の棟札によりますと、建保五年(一二一七)に修造され、更に徳治三年に再建されたこと、及び当時の修造には遠隔の地まで沙汰せられ、有力な豪族が神事を司ったことが明記されています。しかもその当時の建築様式(鎌倉様式)は、その後度々の修造

もありましたが、当時の様式は今によく伝えられ、

棟札と共に国宝に指定されています。

又現時の社名、苗村の称号は社蔵の古文書によりますと、もとこの地域は日本書紀垂仁記三年三月新羅王子天日槍の條に曰う吾那邑あなのみむらでありましたが、その後、那牟羅(前述)に改まり、更に長寸なむらに替えられ、次いで寛仁元年(一〇一七)正月、朝廷に門松用の松苗を献上することの榮に浴して以来、年々の吉例となり、時の帝、後一條天皇はこれを嘉みせられ、苗村の称号を賜り、以后苗村と呼ぶ、と記されています。

斯くて、創祀以来社運年毎に榮えて来ましたが、取り分け天文五

年(一五三六)朝廷の本社に寄せられた格別の恩命は、未来永却に亘って誇りとする処で、社有の記録には、同年三月二十二日、後奈良天皇は、当社に「正一位」の神位を奉授し給い、同四月十九日勅使中御門宗藤・山科言繼を御差遣になり、神位記を奉納され、ついで神主盛繼、修理大夫任官の口宣を御くだしになり、續いて同五月九日、更に天皇は「正一位苗村大明神」の勅額の御下賜があり、又同月十二日関白太政大臣近衛植家公を始め三十人の公卿は、京都において法樂歌会を催され、同月十六日中御門宗藤卿は、使者を以て当日の和歌を送られ、同十九日神主はこれを、神前に奉納されたと伝えています。

誠に当社の栄營これに勝るものなく、社名自ずと四海に遍く次第であります。今日三十余郷の氏人達は、累代に亘って神仕えされて来た春日皇子の後裔である現神主を中心として、この栄營高き当社に余念をまじえず、只管崇敬奉仕申し上げる処であります。

御祭礼

例大祭 四月二十日(古式)

初詣 正月一日〜三日

祈年祭 二月十七日

節句祭 五月五日(古式)流鏑馬

夏祭 八月三日(不動明王大護摩供)

郷祭 十月十二日

新嘗祭 十一月二十三日

霜月祭 十二月十日(古式)

大祓 六月、十二月

月次祭 毎月一日

式年大祭(三十三年大祭)

古は毎年九月五日、氏子三十三ヶ村列座の大祭が行なわれていましたが、慶長四年(一五九九)之れを改め、三十三年に一度の式年祭と定まり、渡御、甲冑武士の行列、太鼓踊、鎌踊等の奉納があり、格別に賑わう大祭であります。

文化財と社宝

指定文化財

国 宝 建造物 西本殿 附 厨子 一基
棟札 一枚

重要文化財

建造物 東本殿
八幡社本殿
十禅師社本殿
楼門
神輿庫
佛像 不動明王



重文、八幡社本殿(室町時代)



重文、十禅師社本殿(室町時代)



重文、神輿庫(室町時代)

その他未指定文化財

石燈籠 三基(一基は六角形、南北朝時代、他の二基は四角形、室町時代)

社宝

口宣案 一通 後奈良天皇奉納
位記 一卷
勅額御書 一枚 後奈良天皇御下賜
勅額 一面
制札 一面 地頭稲葉兵庫守
法楽歌 一冊 近衛植家卿始め以下二十八人奉納
刀 一 豊後国行平作
太刀 一 正宗作
棟札 三枚 及び馬鞍一具 織田信長寄進
以上



口宣案



正二位苗村頼朝

棟札